

ウィントン・マーサリス(tp)のバンドなどで活躍するピアニストのエリック・ルイスが、自身初のリーダー作「ロック・ジャズ Vol.1」を完成させた。ロックの名曲をピアノ1台でカバーした内容はもちろん、スタンディングで演奏するというそのプレイ・スタイルに世界中から注目が集まる中、この10月にはブルーノート東京での来日公演も決定した。独特な音楽観を持つ彼に、その生い立ちから話を聞いた。

Eric Lewis



Interview : Masamichi Asaishi
Photo : Leora Israel

ジャズを聴くようになって、自分が黒人であることを誇りに思うようになった

—日本デビュー作となる「ロック・ジャズ Vol.1」の話を書く前に、あなた自身の紹介を兼ねて子供時代を含めた音楽との関わり、環境などを聞かせていただけますか？

エリック・ルイス(以下EL)：ウチは音楽一家で、僕自身は4代目のアーティストになるんだ。母がクラシックのフルート奏者兼ピアノの先生で、祖母もピアノ奏者だったから、生まれた時から音楽に囲まれて育った。といっても、クラシック音楽だけだね。家はピアノ・スクールを開いていたから、ピアノも4台あったんだ。

—ということは、お母さんのお腹の中に入ったときからピアノを聴いていたことになりませぬ。

EL：そうそう、生まれる前からピアノは聴いていた(笑)。演奏を始めたのは2歳から。でも子供のころに聴いていた音楽はクラシックではなく、それこそ周りの連中が聴いていたポップスだった。11歳か12歳の時、母がリ

このアルバムは僕にとってジャズ産業に対する宣戦布告だ

サイタルで「エンジェルズ・アンド・デヴィルズ」という曲をやることになったんだけど、この曲の前半部分「エンジェルズ」がクラシック形式の演奏で、後半の「デヴィルズ」がジャズ形式だった。それで、その後半の「デヴィルズ」のためにジャズのリズム・セクションが必要で、母がそのリズム隊を雇わなくてはならなかった。たまたまそのリズム隊でドラムを叩いていたデイヴィッド・ギブソンが家に来ていることがあって、そのとき、僕はベートーヴェンのピアノ・ソナタを弾いていたんだ。それを彼が聴いて、母親に「彼は絶対にジャズも勉強するべきだ」と勧めてくれた。それがジャズへの入口になったというわけさ。

—それまでは、まったくジャズを聴いていなかったのですか？

EL：ぜんぜん。さっきも言ったように、主に聴いていたのはポップス。それも、僕の育

った地域は黒人街だったから、ほとんどがブラック・ミュージックだった。好んで聴いていたのはアース・ウィンド&ファイアーかな。でも、ジャズを聴くようになって、自分が黒人であることを本当に誇りに思うようになったんだ。住んでいた環境もあるけれど、それまで黒人といえば、あまり良い場面では登場しなかった。でもジャズに触れ、さらにはウィントン・マーサリス(tp)をはじめとするミュージシャンたちと実際に会ってみて思ったね、美しく、エレガントなスーツを着て、インテリジェントに生活している黒人もいるんだなあ、と。黒人の僕が言うのも変だけど、それまで僕自身が描いていた黒人のイメージが変わったんだ。「ニュー・フリーダム」を手にした感じがしたよ。けっして大げさじゃなく、本当にそう感じた。それ以来、マイルス・デイヴィス(tp)、ジョン・コルト

レーン(ts)、セロニアス・モンク(p)、アーレン・テイタム(p)……とにかくいろいろなジャズ・ミュージシャンを聴くようになって、ますます黒人という人種に誇りを持つことができるようになったよ。

影の世界に生きる“忍者”にヒントを得たソロ・アルバム

—10代のはじめにジャズに傾倒したということですが、当時はジャズのバンドを組んだりしなかったのですか？

EL：いや、そういう機会はなかった。バンドと言えば、高校の最後の年にビッグバンドで演奏したぐらいかな。その後、奨学金を得てマンハッタン・ジャズ・スクールに進学したのだけど、ここで大きなショックを受けた。僕よりも上手いピアニストが大勢いたんだ(笑)。本当にショックで、それ以来、毎日4時間、みっちり練習をした。今考えるとそれが良かったんだと思う。僕のジャズ・ミュージシャンとしての人生はそこから始まったと思っている。

—そのことが、1999年の“セロニアス・モンク・インターナショナル・ピアノ・コンペティション”での優勝に繋がるわけですね。

EL：実は僕は、16歳の時にもこのコンペティションに参加していて、その時はセミ・ファイナルまでしか進めなかった。その次もダメだった。3回目ようやく優勝できたんだ。

—なるほど。あなたの音楽的環境、よく知ることができました。それではデビュー作に話を移したいのですが、今回のアルバムはあなた自身の“ニンジャズ”というレーベルから出されたものなのですね。聞くところによれば、日本の“忍者”と“ジャズ”の合成語とのことですが……。

EL：その通り！ これはひとりで言うと、リヴェンジ(復讐)から生まれたんだ。

—忍者の存在はどこで知ったのですか？

EL：アメリカでショー・コスキの忍者映画が大ヒットして、以来夢中になってしまったんだ。その前に母親から柔術を習うように言われてやり始めていたし、アメリカでもマーシャルアーツが人気で、僕はその後も空手などいろいろやっていた。忍者に夢中になってからは、サムライ、武士道も勉強したし、宮本武蔵の書いた『五輪書』も読んだよ。

—それがどうして、リヴェンジと関係してくるのですか？

EL：僕はマンハッタン・ジャズ・スクールを出て、カサンドラ・ウィルソン(vo)のバツ

クをやり、ウィントンのジャズ・アット・リンカーン・センター・オーケストラにも参加した。その他にもいろいろなマスター・ミュージシャンとも共演し、“モンク・コンペティション”でも優勝した。そこで、そろそろ自分のアルバムを出したいと思い、レコード会社に一生懸命アプローチした。しかし誰ひとりOKと言ってくれる人間は出てこない。ジャズ産業に対し、裏切られた気持ちで一杯になったんだ。そこで自分なりに考えた結果、影の世界に生きてやりたいことをする“忍者”のコンセプトを活かそうと思った。影の世界といっても、僕の知るジャズ世界を表とした場合の影/裏であって、本当はジャズの世界をはるかに凌ぐ大きな世界へ飛び出そうという意思表示でもあるんだ。だから、ピアノも立って弾くことを考えた。コンサートの初めから立って弾く……そんなピアニストはいないからね。もちろん、こういう弾き方をするには肉体的鍛錬を必要とする。僕の立ち方は空手の立ち位置を参考してやっているんだ。こ

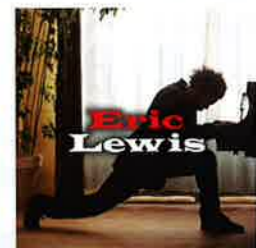


エリック・ルイス
1973年、ニュージャージー州カムデン生まれ。2歳からピアノを始め、14歳でジャズへ転向した。1996年度の“セロニアス・モンク・インターナショナル・ピアノ・コンペティション”で優勝し、その後ウィントン・マーサリス(tp)率いる“ジャズ・アット・リンカーン・センター・オーケストラ”に参加。その他、エルヴィン・ジョーンズ(ds)、ロイ・ハーグロヴ(tp)、カサンドラ・ウィルソン(vo)などと共演し、注目を集める。近年はそれらの活動で得た経験を生かし、独自の音楽性、演奏スタイルを追求し、世界各国で演奏活動を行っている。
<http://www.avexnet.or.jp/ericlewis/>

れは確実に見る人、聴く人にアピールする。普通のジャズ演奏では、まず考えられないよね。もちろん、演奏にも自信があるよ。レオナルド・ディカプリオも絶賛してくれてファンになってくれたくらいだ。とにかくこのアルバムは僕にとってジャズ産業に対する宣戦布告なんだよ。宣戦布告をしたからには、自分のスタイルであらゆるチャレンジをしても勝たなきゃ。たとえ、それがトリッキーな手であろうとね。

—なるほど。演奏内容と同時に、見た目でもアピールするというわけですね。でも、ど

『ロック・ジャズ Vol.1』
エリック・ルイス
エイベックス(ninjazz)
AVCD-38155
10月27日リリース



●収録曲 ● ①ミスター・ブライツ ②ザ・ダイアリー・オブ・ジェーン ③クワックス ④スウィート・ホーム・アラバマ ⑤スメルズ・ライク・ティーン・スピリット ⑥ハートビーツ ⑦ゴーイング・アウンダー ⑧スモーカーズ・アウトサイド・ザ・ホスピタル・ドアーズ ⑨イージー・トゥー・ラン ⑩ライツ・アンド・サウンズ ⑪ナイヴス・アウト ⑫リベヴァー ⑬ペイント・イット・ブラック ●パーソネル ● エリック・ルイス(p)

うしてそれがロックと結びついたのですか？この新作で取り上げた曲は、すべてロックの曲ですね？

EL：ここに収録した曲は、どれもアルバムを作るまで決めてから選んだ。ある時、高校生の前でプレイしたことがあって、その時彼らにもっと盛り上がりたほしいと感じたから、彼らにどうすべきか聞いてみたんだ。そうし

たら「リンキン・パークを聴いてごらん」と言われてね。それで生まれて初めてロックのアルバムを買って、リンキン・パークを聴いてみた。その中に「サムホエア・アイ・ピロング」という曲があって、この曲の歌詞がその時の自分の心境を見事に言い当てていたんだ。同時に、なんとパワフルでエネルギー溢れるサウンドなんだ、と思ったよ。これはチーム・プレイだからこそ得られるサウンドだ。インストゥルメンタル・ジャズとは異なる世界。でも、このパワフルな感じを、自分のピアノ・サウンドとして作り出せたらと考えたんだ。

—このアルバムの選曲は何を基準にしたのですか？

EL：このアルバムで選曲した曲は、すべて歌詞の内容を中心に選んだ。これからもこのロック・ジャズ・スタイルでもっともっと演奏していこうと思っているよ。アート・テイタムが自分のスタイルを確立して何曲も録音したように、僕もそうしたいね。

—ということは、当然『Vol.2』もある、ということですね？

EL：もちろん！

—この10月に来日されると聞いています。

EL：日本には、以前エルヴィン・ジョーンズ(ds)のバンドで2回行っている。でも自分の名義で行くのは初めてだ。僕のパフォーマンスを見たら、きっとビックリすると思うので、ぜひ多くの人に来てほしいな！